

氏 名(本 籍)	楠 木 賢 道 (大 分 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,366 号		
学位授与年月日	平成 10 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	歴史・人類学研究科		
学 位 論 文 題 目	清朝前期における八旗・ジャサク旗体制の研究		
主 査	筑波大学教授	文学博士	片 岡 一 忠
副 査	筑波大学教授		岩 崎 宏 之
副 査	筑波大学助教授	文学博士	佐 藤 文 俊
副 査	筑波大学助教授	文学博士	堀 池 信 夫
副 査	東北学院大学教授	文学博士	細 谷 良 夫

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、清朝前期（1582－1696年）において、清朝皇帝が北アジア・内陸アジア諸民族のハーンとして、通常時にどのようにモンゴル諸部を統治し、非常時にいかにそこから必要な軍事力を引き出したか、また満洲族の八旗とモンゴル族のジャサク旗とをどのように編成して戦場に臨んだかを、満洲族・モンゴル族に共通の「旗」という組織を通して分析し、清朝皇帝のハーンとしての支配体制を検討した研究である。序論、結論と4章、文献表から構成されている。

「序論」は2節から成り、「第1節 問題の所在」では、清朝皇帝と八旗の関係と対比させながら、清朝皇帝とジャサク旗の関係を捉え、清朝皇帝のハーンとしての支配体制に迫ろうとする独自の視角を提示している。「第2節 研究と史料」ではまず先行研究を紹介し、ついで著者が開拓し本論文においてはじめて用いられた満文の文書史料（档案）について、その内容と研究上の有効性について検討を加えている。

本論の4章は、主として入関（1644年）前をあつかった第1章・第2章、対ロシア戦争（1682－1689年）・対ガルダン戦争（1686－1696年）時期をあつかった第3章・第4章に大別することができ、第1章と第2章、第3章と第4章が、それぞれ補完する内容となっている。

「第1章 内ハルハ五部の解体と清朝」では内ハルハ五部を、「第2章 清朝の対ホルチン部政策」ではホルチン部を分析の対象とし、両部を八旗に編入する過程、およびジャサク旗に編成する過程を詳論しながら、皇帝がハーンとして君臨する清朝皇帝の支配体制を検討する。そして皇帝が支配の中心に位置し、その周囲に皇帝を推戴した宗室の諸王が旗王として八旗の各旗を率いて取り囲み、さらにその外縁にモンゴル諸部の各首長が外藩としてジャサク旗を率いて取り囲むという構造をもっていたことを明らかにした。さらにこの支配体制が、清朝皇帝が抱く概念上のものとして存在していたのではなく、ホンタイジが大清皇帝に即位したとき（1636年）すでに、ホンタイジはチャハル部・明朝を共通の敵とする戦争に、帰順したモンゴル諸部を動員し、宗室の諸王が率いる八旗を補強するため八旗と同じ軍事行動をとらせ、同じ軍規を守らせ、違反する者には制裁を加えるという支配の実質をとまっていたことを解明した。またこの支配体制＝八旗・ジャサク旗体制を創出する過程で、清朝がとった3つの対応を分析した。第1の対応はジャルート部の大半をジャサク旗に編成しながら、その一部を内属させ八旗に編入したこと、第2は内属したバヨト部・ウルト部を2段階の中間形態を経て、結局八旗満洲

に編入したこと、第3は1631年の大凌河攻城戦において、ホントイジが、八旗と後にジャサク旗に編成されるモンゴル諸部、そして両者の中間的な性格を持つ個別に内蔵したモンゴル族を編成した2旗、部をあげて内属したモンゴル族を編成した2旗、といった軍事集団を動員し、共通の作戦行動をとらせたことである。この3つの対応を検討し、清朝が八旗とジャサク旗に対して、その起源から、連続した一体の軍事組織を構成するものであると認識していたことを指摘し、清朝の支配体制が、ハーンとしての清朝皇帝、八旗の各旗を率いる宗室の諸王、ジャサク旗を支配する外藩の諸王という広がりを持っていたことを確認した。

「第3章 ブトゥハ＝ニルとダゲールの駐防ニル編入」ではブトゥハのダゲール族に焦点をあて、「第4章 ジャサク旗下のシボ族とその八旗編入」ではホルチン部ジャサク旗支配下のシボ族に焦点をあて、対ロシア戦・対ガルダン戦を契機として、清朝がダゲール族・シボ族に対して統制を強化する過程を詳論し、清朝が緊急時に必要な軍事力を引き出す方法を分析し、以下の事実を明らかにした。1683年康熙帝は黒龍江將軍にサプスを任命し、当該地区の駐防八旗の司令官とし、対ロシア戦の後方支援をさせるために、制度上ジャサク旗に準ずるブトゥハのダゲール族、ホルチン部のジャサク旗、ホルチン部のジャサク旗支配下のシボ族に対して、統制を加えていった。そして対ガルダン戦に備えて、1691年康熙帝はブトゥハに関する事案全般の最終的な責任を黒龍江將軍に負わせ、ブトゥハを直接管轄していたソロン総管を黒龍江將軍に統轄させ、ソロン総管を副都統銜として、黒龍江將軍の統轄下のもとで、チチハルの駐防八旗を管轄させることにした。すなわち、対ロシア戦・対ガルダン戦という軍事的危機を乗り越えるため、康熙帝は駐防八旗の司令官である黒龍江將軍と、理藩院統轄下にあるソロン総管とに統属関係を設定したのである。また康熙帝は対ロシア戦・対ガルダン戦において、ジャサク旗・ブトゥハの構成員であるシボ族・ダゲール族を八旗に編入し、八旗を支援するためジャサク旗に八旗と同じ軍事行動をとらせた。康熙帝は宮廷財政を担当する内務府の財源から費用を支出して、ホルチン部のジャサク旗下から首長権を買い取ったシボ族らを八旗に編入するにあたって、康熙帝自身が旗王として直接支配する上三旗（鑲黃旗・正黃旗・正白旗）の旗分とすることにこだわった。シボ族らの八旗への編入は、ジャサク旗から皇帝が旗王として直属させる上三旗への移管だったのである。

そのことから、北アジア・内陸アジアのハーンとしての清朝皇帝の支配体制が、支配の中心に皇帝が位置し、その周囲に皇帝を推戴した八旗の諸王が各旗を率いて取り囲み、さらにその外縁に外藩モンゴルの諸王がジャサク旗を率いて藩屏として取り囲むという入関前からの構造を、対ロシア戦、対ガルダン戦期においても保持していたことを解明したとする。

「結論」では、各章の論点を総括的に捉え直して、上記の分析結果を導き出している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、とかく清朝を中華帝国とみなして、清朝皇帝の性格を中国王朝の皇帝の側面を強調する従来の研究に比して、清朝皇帝が北アジア・内陸アジア諸民族の支配者「ハーン」であるという側面を重視し、その支配体制の特徴をモンゴル諸部に対する統治、とくに軍事組織である八旗・ジャサク旗の支配関係を、新出の満文史料を駆使して検討した研究である。その着眼点は斬新的で、今後の清朝史研究に刺激を与えられ、この点でまず高い評価が与えられる。つぎに、新出史料の分析によって、八旗・ジャサク旗は固定的ではなく、清朝皇帝がジャサク旗を八旗に改編するなど、つねにその支配権を強める努力を続けていたこと、その結果清朝皇帝（ハーン）を中心に、八旗、ジャサク旗がその周りを取り囲む「八旗・ジャサク旗体制」が構築されていた過程を具体的に解明したことは大きな成果として評価できる。さらに、康熙帝が新たな軍事力確保のため、ダゲール族・シボ族を駐防八旗に編入したことの指摘は、清朝の軍事力の組織化が対ガルダン戦時期（1690年代）に至っても継続されていたこととともに、清朝の支配の根幹が軍事力であることを証明するものである。これらの指摘は従来の行政組織の面から強調されていた清朝支配体制の特徴についてもひとつの側面に照明をあてたことで、

本研究のために調査・収集された膨大な満文史料とともに後人に裨益するところ大なるものがある。以上の評価すべき諸点は、今後の研究のさらなる発展の確固たる礎石となりうるであろうことを期待させるものである。

しかし、問題がないわけではない。ハーンとしての側面を強調するあまり、皇帝の側面の分析が弱く、両者の比較や入関（1644年）以降の清朝体制の変化に対する配慮に欠けるきらいがあること、「旗」のもつ軍事組織と社会組織の両側面に対する叙述が十分には整理されていないこと、また熟されていない用語や訳語の使用がみられることなどは、解明された諸点に対する評価が高いだけに惜しまれる。とはいえ、これらの問題点は新出史料の分析によって新たな境地を開拓せんとするときには起こりうることであり、今後の検討によって解決されることが望まれる。

本論文は残された問題があるとしても、総体として表題のテーマから清朝皇帝のハーンとしての側面を解明し、清朝体制の二面性を指摘せんとする本論文の目的は十分に達せられたものといえる。そして、その視点の斬新さ、新出史料の利用といった点を加味すれば、十分独創性があり、学界への貢献が大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。